

Lib.

v.32, 増刊号 (Dec. 1, 2005)

発表！！

第1回京都産業大学図書館 書評大賞

| | |
|------------|--------|
| 入賞者一覧 | 2 |
| 全体講評 | 3 |
| 入賞作品ならびに講評 | |
| <大賞> | 4 5 |
| <優秀賞> | 6 - 15 |
| <佳作> | 16 35 |
| 概要・統計 | 36 |

第1回京都産業大学図書館書評大賞

第1回京都産業大学図書館書評大賞には125篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で審査した結果、次の通り受賞者が決定しましたので発表します。

| 大 賞 | |
|-------------------------------------|----------------|
| 氏 名 (所 属) | 書 評 対 象 図 書 |
| なかじま ひろし 中嶋 寛 (経営学部経営学科 3 年次生) | 『日本中小企業の適応と変化』 |

| 優 秀 賞 | |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| きじ としゆき 貴治 利之 (外国語学部中国語学科 4 年次生) | 『夜回り先生と夜眠れない子どもたち』 |
| いそわ まりえ 磯和 真里恵 (法学部法律学科 3 年次生) | 『虚無への供物』 |
| なかやま あやか 中山 彩佳 (理学部物理学科 3 年次生) | 『スノーボール・アース：生命大進化をもたらした全地球凍結』 |
| なかおひとみ 中尾 仁美 (法学部法律学科 1 年次生) | 『教養としてのロースクール小論文』 |
| はしづめ ようすけ 橋爪 陽佑 (経営学部経営学科 2 年次生) | 『日本縮小：ダウンサイジング社会への挑戦』 |

| 佳 作 | |
|---|--|
| くすはら しんぺい 楠原 慎平 (文化学部国際文化学科 4 年次生) | 『無情の世界』 |
| はらだ のりあき 原田 憲明 (経営学部経営学科 3 年次生) | 『身体感覚を取り戻す：腰・ハラ文化の再生』 |
| たなか あいこ 田中 愛子 (法学部法律学科 3 年次生) | 『自閉症裁判：レッサーパンダ帽男の「罪と罰」』 |
| まえだ ゆうすけ 前田 裕介 (法学部法律学科 3 年次生) | 『立法過程』 |
| あきた まどか 秋田 まどか (経営学部経営学科 3 年次生) | 『なぜノキアは携帯電話で世界一になり得たか：携帯電話で IT 革命を起こす』 |
| そう か けつ 曹 佳洁 (経営学部経営学科 3 年次生) | 『北京：胡同に生きる』 |
| いまい みお 今井 美央 (経営学部経営学科 1 年次生) | 『21 世紀企画書：日本型インターネットの可能性』 |
| たかはし あきひろ 高橋 亮宏 (経済学部経済学科 3 年次生) | 『ホーキング、未来を語る』 |
| まるお まゆみ 丸尾 麻由美 (経営学部経営学科 2 年次生) | 『きらきらひかる』 |
| やまざき しんじ 山崎 真司 (法学部法律学科 3 年次生) | 『成功への情熱：Passion』 |

全体講評

図書館長 佐々木 利廣

まず第1回京都産業大学図書館書評大賞に積極的に応募してくれた数多くの学生に厚く御礼を申し上げます。館内で書評大賞について議論をしているとき気にかかっていたことは、自分が読んだ本の書評を書きたいと思う学生がどれだけのいるだろうかという点でした。しかし自分が夢中になった本の面白さを、他の人にも伝えたいという知的欲求は誰にでもあり、その欲求を満たす場やチャンスがあれば必ずチャレンジしてくれるという思い込みから図書館書評大賞を企画することになりました。幸いにも多くの応募者があり、図書館委員と図書館職員合わせて8名の選考委員は、この2ヶ月余り嬉しい悲鳴を上げながら審査に当たってきました。1回生から4回生までほとんど全ての学部から応募があり、対象図書も非常にバラエティに富んでいました。

審査は、本人に関わる情報を全て伏せ受付番号のみで、まず館内第一次審査をおこないました。文章の体裁や制限字数や対象図書が図書館所蔵かどうかなどをチェックしながら、書評としての必要条件を満たすものだけを選択しました。この段階で57編の書評が選択されました。この書評を8名の選考委員が全て読了し、あらかじめ決められた審査項目に従って点数評価を行いました。各選考委員の点数評価を合算しながら入賞作を審査しましたが、上位者の点数間の差はさほど大きくなく力作ぞろいでした。

選考委員会において大賞、優秀賞、佳作合わせて16名の入賞者が決まりました。この場を借りて、各選考委員から出された意見を集約しながら第1回京都産業大学図書館書評大賞の全体講評としてまとめておきます。入賞者ごとの講評に関しても、それぞれの選考委員の講評を持ち寄り、選考委員会の責任で調整いたしました。なお入賞作については、書評者が選考委員のコメントを参考に誤字や句読点の一部を修正したところがあります。

16名の入賞者に共通するのは、書評する図書をコンパクトに要約し他人に伝える能力に優れているという点です。主観的に理解し判ったつもりでも、いざそれを文章で客観的に表現するとなると難しいものです。この作業が中途半端に終わっている書評が見られるという意見が、多くの選考委員から出ました。自分の考えを、他人にわかるように説明し伝える能力を養うには書評作業が一番です。ぜひこれからも書評大賞に果敢にチャレンジしてほしいと思います。また今回、残念ながら入賞には至らなかった学生も、入賞作や選考委員の助言やコメントを参考にしながら再度挑戦してほしいと思います。

その他に入賞者に共通することとして、常に自己を開示しながら対象図書を評価している点です。ただ面白かったとか感動したというだけでなく、なぜ面白かったか、あるいは感動したかの理由を明確にしていることです。これが感想文と書評の違いかもしれません。応募作品のなかには、この文は著者の評価なのかそれとも書評者の評価なのか判然としないものも多くありました。常に自分をさらけ出すという気持ちで書評作業に取り組んでいれば、自然と読書感想文以上のものが生まれてくるはずですよ。

最後に触れておきたいのは、誤字脱字、同音異義語の誤用、句読点、改行、てにをはなど日本語表記にミスがある応募作が多かったという選考委員の指摘です。書評に限らず文章を書くときには、つねに辞典類を手許に置くことを是非薦めます。そして来年度も第2回京都産業大学図書館書評大賞に積極的にチャレンジしてください。

最後になりましたが、今回の第1回図書館書評大賞の審査に多くの時間と労力を注ぎ込んでいただいた図書館委員の河原先生(経営)、前田先生(外)、耳野先生(法)、山岸先生(工)をはじめ図書館職員の皆様、協賛いただいた丸善株式会社と株式会社紀伊國屋書店に厚く御礼申し上げます。



大賞

なかしま ひろし
中嶋 寛



書名：『日本中小企業の適応と変化』

著者：河崎亜洲夫

出版社・出版年：八千代出版，2002

進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンの著書に『種の起源』というものがある。彼はこの中で、「この世を生き延びられるのは、最も強い種でもなく最も賢い種でもない、変化に最もよく適応できる種である--It is not the strongest of the species that survive, nor the most intelligent, but the most responsive to change--」という言葉を残している。この言葉は単に地球上で生活をする生物だけでなく、企業という一見変わった“イキモノ”にもあてはまるように思える。近年、目まぐるしく変わる環境の中で、企業はいかにその環境に適応できるかが問われている。

バブル崩壊以降、不良債権問題、産業空洞化現象、顧客ニーズの多様化、それによる既存産業の成熟化などにより、日本経済は停滞し続けた。特に中小企業は大企業に比べ、現在より一層厳しい状況に置かれている。本書は、中小企業の中でも技術革新や国際競争などに強い影響を受けてきた中小製造業部門にスポットを当て、当該企業がどのようにして環境変化に適応してきたかや、今後の中小企業の理想のあり方を明らかにしようとしたものである。

中小企業にも様々な業種があり、それ相応に特徴がある。もちろん、業種によってあるべき姿は異なるであろうし、業界内のKFS(Key Factors for Success；主要成功要因)も変わってくるはずである。すなわち、中小企業全体を一つにまとめ、それを対象として特徴や今後のあり方を論じている書籍は、あまりに大まかであり雑駁としている。本書の特長は中小企業全体を対象とするのではなく、中小製造業という分野に絞り、その分野における環境変化や存立条件等の変化に対する適応を具体的な事例を挙げながら論じている点である。私が数ある中小企業経営に関する文献の中から本書を選んだ理由もここにある。

本書は六章から成っており、第一章「日本の研究開発型企業；日本の開発型中小企業の特質」や第二章「中小機械完成品企業の諸特徴」においては、概況、市場規模、諸項目の日米比較など、精細にタイトル分けがされており、非常に理解しやすい構成となっている。また、第三章「中小機械関連・研究開発型企業の事例研究」や第六章「中小企業の技術変化と労働力構造についての事例研究」では、実在する企業名を上げ(一部匿名)、その事例を載せ、研究・分析を行っている。実際の企業行動や環境変化の様子をあるがままに記載しているため、なにより信憑性が高い。理論のみをひたすら並べている分厚いだけの書籍とは違うのである。また、結果や数値のみを羅列した雑誌などとも違う。理論だけが先走りしてしまいがちの経営学において、実在企業の行動を扱っていることは、読者の理解の手助けとなる。当該企業の社長に感情移入してしまい、社内の雰囲気が目には浮かぶのである。

また、本書にはトップマネジメントの方法論だけでなく、様々な業務戦略レベルの内容も詳細に記されている。中小製造業ならではの生産管理や研究開発の分野はもちろん、販路開拓、セールスプロモーション等をはじめとするマーケティング戦略の内容も事例をとりあげながら詳細に記されている。記載されている企業の問題点がそれぞれ異なり、それ

それぞれの対応策が挙げられている。よって、中小製造業に起こりうるほとんどの諸問題やその要因、対応策等を読者は体系的に会得することができるのである。加えて、本書の特長は、各章の終わりに“むすび”として、各章のまとめや今後の経営上の課題を2ページほどにまとめているところである。ここにも、読者により分かりやすく内容を把握してもらうための筆者の工夫が見受けられる。

環境が変化してだけでなく、環境変化の仕方も時代とともに変わっていく。本書ではできる限り最近の事例、研究結果を用いている。大学卒業生の中小企業への就職率の増加、海外企業との提携、成果主義を基とした賃金体制への変革等、近年の新しい要素も本書には盛り込まれている。

既述のように、本書では、中小企業を社会全体の中でのそれとして分析・研究を重ね、記載したマクロ的な要素と、実在企業のマネジメントを焦点としたミクロ的な要素が上手くかみ合っており、中小企業経営をより広く、深い視野から見ることができる。経営学を学ぶ学生にはもちろん、中小企業に関わる社会人のビジネスバイブルとしても活躍するであろう。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 佐々木 利廣

まず多くの選考委員が共通して挙げた長所は、構成や文体などを含めて最もオーソドックスで無難な書き方の書評であったという点である。文章としての起承転結を意識し、対象図書を読んだことのない他人に分かるように要約しながら、自らの批判的あるいは独創的見解を述べるという書評作業は、決して簡単な作業ではない。応募された書評の大半は、対象図書を理解することに拘泥し、その内容を他人に伝える術を考えるまでには至っていない。その点では、この書評は対象図書の内容をコンパクトに過不足なく伝えることに成功している。

第二に選考委員の多くが挙げた長所は、書評の書き出しで引用したダーウィンの言葉である。書評者が、種としての中小企業群あるいは中小製造業群を強調しようとしているのか、それとも個別の中小製造企業を強調しようとしているのか判然としないという選考委員の意見も出たが、書評の導入部文としては秀英という意見が大勢を占めた。

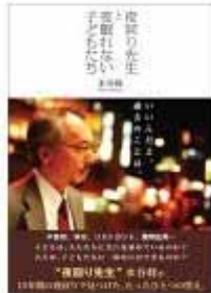
さらに第三の長所として、書評者がマクロな視点からの中小企業一般を議論する中小企業論に満足せず、実在する中小企業のマネジメントに重点を置く中小企業経営論に興味関心を有していることが書評から十分に伺えるという点である。中小企業経営に関する多くの文献のなかから、書評者がなぜ対象図書を選択したかについて明確な主張がなされている点も評価された点である。

その他選考委員の意見として、第3章や第6章で分析されている企業のケースを1つ紹介しながら批判的検討を加えることで、より読者を引きつけることができたのではないかというコメントがあった。実在企業のトップマネジメント戦略や業務戦略についての厚い記述を評価する書評者であれば、もう少し具体的事例にまで落とし込んで内容紹介をすることを考えてもよかったのではないか。さらに付け加えるとすると、どういう形式であれ対象図書に対するより積極的批判がおこなわれてもよかった。しかしこうしたコメントを差し引いても、京都産業大学の学生が書く書評の一つの標準を創りあげたことは評価に値することである。

受賞者から一言



この度は、第1回「京都産業大学図書館書評大賞」の大賞に選んで頂きありがとうございます。思いもかけない大賞入選のご報告を受け、正直大変驚いております。所属ゼミを担当して下さっている大木先生をはじめ、多くの方々のお力添えのおかげであると思います。今回の入賞を自信にし、今後もビジネスマンとして必要な論理的思考力、文章力の向上に励みたいと思います。



書名：『夜回り先生と
夜眠れない子どもたち』

著者：水谷修

出版社・出版年：サンクチュアリ・パブリッシング，2004

教員を目指す私が、この本に出会ったのは昨年秋のことである。水谷修氏の講演会でこの本に出会い、食べるのも忘れて読み耽った。水谷先生は教師生活のほとんどを少年の非行や薬物問題に捧げ、日々「夜回り」と呼ばれる深夜パトロールを行いながら、若者の更生に尽力している。

不登校、非行、リストカット、薬物乱用……現代の子どもたちは、我々大人たちに何を求めているのだろうか。大人は、子どもたちに一体何ができるのか。この問いは、決して単純明快なものではない。「こんなこともできないのか!」「何やってるんだ!」「そんなことでどうするの!」など、学校や家庭ではそんな心ない言葉が満ち溢れていると著者は述べている。果たして子どもたちはそんなに駄目なのだろうか。著者も私も決してそのようには思わない。

けれども大人の厳しい言葉がいま、心優しい子どもたちをどんと間に追い込んでいく。本書から「せめて一言だけでいいから身近にいる子どもたちに愛のある優しい言葉をかけて、そしてほめてあげてほしい。」という先生のアツイメッセージをひしひしと感ずることができる。

著者は、子どもはみんな「花の種」だと考えている。だから、教師、親、地域の大人、マスコミといった社会全体が、子どもを慈しみ、愛し、丁寧に育てれば、子どもは必ず美しい花を咲かせることができるはずと語っている。もし花を咲かせることなく、萎んだり、枯れたり、腐ったりする子どもたちがいるならば、それはまぎれもなく大人たちの責任であろう。そのような子どもたちに出会ったならば、まずはその子のよいところを見つけ、認めてあげることが第一歩である。なぜなら私も含めて、人間は褒められると凄いパワーを発揮する動物だからである。

加えて、昔の親は子どもを叱って育てたと言う。現在多くの親は、子どもが誤った道に進んだ時でも本気で叱るという行為をしない。理由は叱ると子どもに嫌われるからである。これは教師も同じことが言えるのではないだろうか。生徒たちに嫌われないために、優しい先生を演じる。そして、子どもたちは教師を蔑む。正しく叱れば、今日嫌われても、明日は好かれるはずだ。大人になってから、やはりあの時、親や教師は正しかったと心優しい子どもたちは必ず気づいてくれるだろう。ところが、今の親は、叱らない代わりに、子どもが失敗したり間違えたりしたときは、思い切り馬鹿にする。親や教師は子どもを正しく導かねばならない。それが指導、教育である。人として、なすべきこと、なしてはなら

ないことを、親は子どもと共に話し合うべきだ。教えるのではなく、話し合い、子どもと一緒に、親も考えるのである。高校生にもなれば、多くの子どもは知力、体力、精神、全て大人よりも高次元に立ってしまう。唯一大人が誇れることと言えば、人生経験だけだ。この経験を基に、大人になって社会に出て行くとはどういうことなのかを話し合っていきたいものである。実際、私自身も家族のみならず、周りの人間と本書を読んで教育について考えるようになった。

水谷先生の著書は、訴えに熱がこもっており、心に響く。その熱（エネルギー）の核となっているのは、子ども達に対する愛情と熱意であることは言うまでもない。本書は、これまでに寄せられた子ども達の相談を紹介しながら、いま大人が何をしなければならないのか、苦しんでいる子ども達に何が必要かを切実に訴えている。13年間という長いようで短かった日々。ただただ敬服するばかりである。13年間夜の街を回り、子ども達に救いの声をかけてきた。「いいんだよ。過去のことは。」慈しみのあるいい言葉だ。「あなたが死ぬと、水谷は哀しいです。」なんとあたたかい言葉ではなからうか。間違いなく今苦しんでいる子ども達、そして自分の周りには苦しんでいる子どもがいないと思っている大人達、そしてこれから大人の階段を上っていく大学生に是非とも読んでもらいたい一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 河原 省吾

書評者のこの本に対する思いが伝わってくる書評である。

短時間で読みきることも可能な分量だが、それを容易に許さないような内容に満ちた本である。要約することの難しい本に挑戦した姿勢をまず評価したい。

それを評価した上で、この本のもつ迫力が十分に伝えられているか見てみよう。この本には、社会から見棄てられた子どもと家族のことが書かれている。たとえば、売春で11人の子どもを育ててきた女性。あるいは、父親から性的虐待を受け、世間体を気にした両親によって精神病院に預けられた娘。書評者はおそらく、これらの凄まじい現実の前に言葉をうしなったのではないかと想像するのだが、どうだろうか。

一方、著者の水谷氏の子どもたちにかかわろうとする姿勢については、詳しく取りあげている。「いいんだよ。過去のことは。」という言葉の重さ、この言葉をかけられた子どもがいかに救われるか、この本の魅力がよく感じられる部分である。

書評者は自身の意見と渾然一体となるくらいまでに、この本に入りこんで読んだのであろう。本気で叱ることの大切さについて述べた段落は、書評者自身の意見だと思われる。水谷氏の厳しさは少し異なる。一步を踏み出すのは子ども自身であること、このことを真に知っている人の厳しさである。

受賞者から一言



このような賞を頂いたことをとても光栄に思います。私自身も教師を目指しており、水谷先生のアツイメッセージが書かれた本書を是非皆さんにも一読していただきたいものです。昨今活字離れが叫ばれていますが、我々も読書を通して、想像力や思考力を身に付け、豊かな感性や情操、思いやりの心を育てていきたいものですね。

書名：『虚無への供物』

著者：中井英夫

出版社・出版年：東京創元社，1996

「ミステリー」というジャンルを語る上で、なくてはならない作品がある。中井英夫著『虚無への供物』がその一つだ。1974年に刊行された本書は、戦後の推理小説ベスト3に数えられる作品でありながら、「アンチ・ミステリー」としての側面も持つ、たいへん稀有な推理小説である。

東京の下町にあるバーで、忘年パーティーの余興の幕が開くところから物語は始まる。カーテンが開いていく様子の描写が丁寧で、臨場感は抜群である。このため、読者は僅か数行でこの作品の世界に惹き込まれてゆく。同時に、本書における「ミステリー」の幕開けを予感させるものにもなっている。このあと起こる数々の事件との関係はここでは伏せるとして、このバーでのシーンにはこの作品が持つ独特の「空気」が充満しているように思える。この「空気」に浸ったところで、徐々にストーリーは転がり出す。

本書の特徴の一つとして、「丁寧な人物描写」が挙げられる。先のカーテンの描写もそうだが、登場人物についても同様に、実に丁寧な描写がなされているのだ。設定の細かさは勿論のこと、それぞれの人物の立ち振る舞う様子までもが容易に浮かんでくるのは見事である。例えば、探偵役の一人であり、紅一点の奈々村久生（奈々緋紗緒）である。彼女はラジオ・ライターの仕事の本職としながら、駆け出しのシャンソン歌手でもあり、しかし本人は探偵が一番性に合っていると思いついて入っているという、個性的で魅力的な設定になっている。年齢こそ明らかにされていないが、彼女の言動や服装の描写から、“奈々村久生”という架空の人物に命が吹き込まれ、読者の頭の中で軽快に動き出すことだろう。これは余談になるが、本書が数年前にNHKで実写ドラマ化された際、この久生を演じたのは、女優の深津絵里さんだった。個人的には、何とも巧いキャスティングであったと思う。久生のサバサバした性格や抜群の行動力を表現する上で、深津絵里さん独特の存在感が巧くマッチしていたように思うからである。

ところで、本書が本格推理小説として高い評価を受けているにも関わらず、「アンチ・ミステリー」としての側面も同時に持ち合わせている所以は何であろうか。一言で言ってしまうと、著者である中井英夫氏が自らそれを狙ったためである。いずれの犠牲者も自殺や過失死、事故死であるとしか考えられない状況＝密室の中で発見され、そのまま最後までストーリーが進行していくことや（無論、最終的には全て密室殺人であったことが明らかになる）、残虐な犯行に及んだ犯人が最後に見せる心理的な弱さなど、随所にどこかアンバランスさを感じさせるのだ。最も特徴的なものは、犯人の動機である。現実の殺人事件においては、その動機は怨恨であったり生活苦によるものであったり、いずれもとにかく生々

しいものである。その生々しさが、この推理小説の犯人には欠けている。どこか崇高で現実離れした動機によって、犯人は罪を犯していく。それが犯行の残虐さと相まって読者にアンバランスな印象を与え、故に「アンチ・ミステリー」という表現がしっくりくるのかも知れない。そして、このアンバランスさこそが、『虚無への供物』という推理小説の面白さであると思う。

この小説のラストは、冒頭とは反対にカーテンが閉まっていく様子の描写で締め括られている。両方に同じ描写を用いることで、物語の始まりと終わりが実にはっきりと伝わってくる。カーテンを閉じた人物、つまり事件に幕を降ろした人物　これがある意外な人物であることで、『虚無への供物』というタイトルに相応しい、何とも言えない虚無感の残る読了感を味わうことが出来るのだ。推理小説ファンならずとも、是非一読されたい。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語部教員 前田 比呂子

内容の紹介や描写におけるテンポの良さ、含みを持たせた最後の段落などで読み手の興味をそそる好作品となっている。個性的な登場人物の紹介や物語の冒頭と末尾の対比を取り上げることにより、本小説の持つ独特の雰囲気や匂いを伝え、読み手を惹きつけることに成功している。また、なぜこの小説を取り上げるのか、なぜ「アンチ・ミステリー」なのかについても考察、説明しているので、書評として読み応えのあるものになっている。

だが、今後より良い書評を目指すうえで、まだ不十分な点も見受けられる。例えば、この小説は発表されてからかなり長い年月を経ている。それを書評するからには、現在においても同小説が「戦後の推理小説ベスト3」に数えられる理由やその魅力が色あせない理由などを他の作家の推理小説や同じ作家の他の作品とも比較しながら考察するといった工夫が必要であろう。「余談」の部分を縮小または削除するなどしてそうした点について言及すれば、読み手をより納得させられる作品に仕上がったのではないか。こうした点に留意して、今後別のジャンルの書評にもぜひ挑戦してみたい。

受賞者から一言



書評には、主観的な感想だけではなく客観的な視点も要求されるので、今までとは違った本の読み方を体験することが出来ました。元々読書は好きなので、機会があればまた書いてみたいと思います。





書名：『スノーボール・アース：
生命大進化をもたらした全地球凍結』

著者：ガブリエル・ウォーカー
渡会圭子訳

出版社・出版年：早川書房，2004

「ツメタイ シセン」

「どおりや～～！」「痛っ!?!」「冷たいー。」

幼い頃、雪が降ると雪合戦をしたことを覚えている。雪玉を作っては投げ、寒さも忘れて夢中で遊んでいた。卑怯な手として雪玉に石を隠して投げるといふのがあつたが（実際にはそのようなことをしてはいけないのはもちろんだ）、今、それを思い出してみたい。そして、中心にある石を地球に置き換えてみたい。地球が雪や氷に全て覆われた様子が想像できたろうか。この現象が、実際に起きていたかもしれないのだ。それも何回も。

スノーボール・アース（全地球凍結仮説）、この言葉を聞いたことがあるだろうか。簡単にこの仮説を説明すると、地球が出来てから今までの間に、少なくとも2回地球が全て凍り、それが生命の大爆発につながったのではないかというものである。その氷の厚さは3000m近く、富士山のほとんどが埋まってしまうほどの高さだつたと考えられている。この仮説を知る人はまだそれほど多くないと思われる。知つたところで、信じられない人や冷やかな意見を持つ人が大半を占めるであろう。私もこの本を読むまではその1人であつた。

しかし、本物の雪玉のように割れてなくなると思われた仮説は、確実に真実味を増してきている。今までは、過去の地球は現在と変わらなかつたという説（斉一説）が主な地球観であつたが、何年後にはこの仮説が信じられ、地球は大きな変化をしてきたという地球観に変わるかもしれない。地球が太陽の周りを回っていること（地動説）や大陸が動いていること（プレートテクトニクス理論）も、かつてはばかげていると相手にされなかつた。しかし今では、現象がすべてわかっているとはいえないが、様々な観察などにより証明され、大まかな点ではこれらを疑う人はいないであろう。この本では、仮説の始まりから、地動説やプレートテクトニクス理論のような確実なものになりつつある過程が書かれている。

大きくわけて地質学と生物学の面から検証されているが、専門用語が多く使用され、ぱつと読んだだけでは何を言っているのかわからないことが多く、とっつきにくい印象を受ける。しかし、専門用語がわからなくても、十分楽しめるようになっている。

例えば、検証に必要な古い地層がむき出しになっているようなところは、大自然のど真ん中であることが多い。研究者らが実際にその場所に行き調べている様子が、自分がその場にいるかのように伝わってくる。北極では熊と、砂漠では象や蛇と対峙したときは、固

唾を呑んで読みすすめた。危険な動物に加え、急激な気温変化や困難な生活の様子が詳しく書かれ、過酷さが容易に想像できる。これらの描写により、立証に向けた熱意が一段と伝わってきた。

また、人物像や人間関係も詳しく書かれており、冷たい反論を受けながらも多くの人が様々な分野からそれぞれ検証していき、一步一步確実に立証に向かって進んでいく様子にはどんどん惹きつけられる。まるで激しく雪玉が飛びかう雪合戦を見ているような気持ちだ。何がきっかけで凍りはじめたのか。現在の地球の姿になったのはなぜか。すべて凍った地球で、どのようにして生物は生きのびたのか。多くの人が関心を持つと思われる疑問は、私たちの想定外の出来事によって引き起こされたのではないかと考えられている。ユニークな、しかし実際に起こっていたかもしれない現象は、どのようにして引き起こされたのだろうか。

その答えは、自分で読んで確かめてみてほしい。なぜならこのように、仮説そのもののおもしろさはもちろん、仮説をめぐる議論、物語のおもしろさもあり、なるほどと思うと同時に、次はどうなるかとワクワクさせられながら読むことができるからだ。

新しいことが受け入れられるまでには、多くの人、時間、結果などが必要不可欠であり、それらがあって初めて成り立つ。これは、全地球凍結仮説のみに限ったことではない。雪合戦も一見個人の戦いのように見えるが、仲間や敵も大切である。これらがないと始まらないし、より良くなったり、おもしろくなったりする。全地球凍結仮説は、冷たかった地球を立証しようとする人々と冷たい意見を浴びせる人々によって活発に議論されたことにより、大きく動きはじめた。巨大な雪玉の完成は近いのかもしれない。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 山岸 博

100 を越える応募作品の中で、ごくわずかしかなかった自然科学系の本の書評の1つである。近年、地質学上の新説として急伸してきた「雪玉地球説」をわかりやすく紹介している。全体の構成に流れと書評者なりの工夫があり、読者に「この本を読んでみようか」という気を起こさせる。

工夫とは導入部に誰もが経験したことのある雪合戦を持ってきたことや、「雪玉地球説」自体を雪球に模したことなどである。これらは、本書の内容を我々の日常生活に近づけて親しみを持たせようとする、書評者なりの意欲の結果と考えられる(ただしそれらの手法とその効果については選考委員の間で意見が分かれた)。

今回の応募作品の多くにおいて、本の内容を紹介する部分の記述が、単純な要約や一部の抜き書きにとどまっていた。その中で本作品の書評者は、実際に読んだ時の感想や意見を織り交ぜながら紹介するという独特の方法をとっている。このことが読者に臨場感を抱かせる。

しかし残念ながら、文章表現上の厳密性に欠けるところが何カ所か目につく。たとえば最後の段落の最初の文章の主語は何だろうか? 個々の文章について、もう一段の推敲がほしかった。

受賞者から一言



優秀賞に選んでいただき、ありがとうございました。賞に選んでいただいたことはもちろんですが、それ以上に、この本に出会い新しい事実を知ることができたということを楽しんでいます。これからも多くの本と出会い、多くのことを得ていきたいです。



書名：『教養としての
ロースクール小論文』

著者：浅羽通明

出版社・出版年：早稲田経営出版，2005

この本のタイトルは『教養としてのロースクール小論文』となっているが、決して受験生に限られた答案作成テクニック本ではない。確かに、ロースクール受験の際に未修者コースを受験する者に課される「一般的な小論文試験」のための対策本として書かれたものである。しかし、その視点が、「問題を考えるにあたって、常にヒントとして使えるより根本的なものの考え方のパターン（従来、哲学とか思想とか扱ってきたもの）を紹介するもの」（著書引用）にある。要するに、現代において「或ること」が言われると、そう言われる背景にはこんなことがあって、それが一体どういうものであり、時代的に「或ること」とどんな関連があるかといったような一連の倫理学的背景を一度に知ることでできる教養本であるといえる。小論文出題者側が意図して期待している知識なり教養なりを読者に伝える参考書なのである。ひいては、この本は、ロースクールを受験する人もしない人も、知識的背景がある人もない人も、すでに大人になった人も、これからなる人も、万人が楽しめる哲学書であろう。

哲学書と聞けば、堅いイメージがあるかも知れない。現に、私も一瞬怯んだが、読み進めると恋愛小説を読んでいるかのように夢中になる。それは何故か。まず、それは文体の良さのためであろう。難しいことを難しく書いてあるのは普通であるが、この著者は基本的な思想や古典を難解なものほどより噛み砕いて、旧知の者に語るような口調で文章を進めている。第2に、この本のストーリー性のためである。この本は、小論文出題者のテーマを6つ扱っているが、1つのテーマからいくつかのヒントを展開させている。

具体的に1つ目のテーマについて紹介しよう。それは、応用倫理学の重要テーマでもある一例「愚行権」についてである。これを手がかりに「パターナリズム」、「リバータリアン」、「コミュニタリアン」、「グローバリズム」、「ナショナリズム」、「クオリティ・オブ・ライフ」について解説している。「愚行権」に始まり、「個人主義」から社会の多数者概念や、その道德論の相対性とか曖昧さを突き進める一方、その「愚行権」を否定する「パターナリズム」を様々な論者の見解から述べ広げている。

そもそも「愚行権」とは「バカな行動、どう考えても、損しかしない行動とか、自分を不幸にする行動をする権利」（著書引用）である。19世紀イギリスの思想家J.S.ミルの『自由論』に「文明社会の成員に対し、彼の意志に反して、正当に権力を行使しうる唯一の目的は他人に対する危害の防止である」というのがある。これは、個人は勿論尊重されるが、他人を傷つけてはいけないうように、他人もまた意志を尊重されるべき個人であるという原

則を示している。この原則に対極する思想が「パターナリズム」である。つまり、相手の意志を無視してでも押し付けるといった性質のものである。例えば、親が子に転ばぬ先の杖と言わんばかりに保護しようと、子の行動に干渉することである。そんなことをしてはいけない、あんなことをしてはいけない、と。当然、子は文句を言う。何事もエスカレートすると良くないものが生まれる。

「パターナリズム」がエスカレートした結果が「マターナリズム」である。例えば、母親が受験を控えた息子に、「あなたはなにもしなくていいのよ、お母さんが決めてあげるから」と言い続ける行為が「パターナリズム」であるとすれば、息子は自分で考えるのを止めてしまって「僕はどうすればいいか決めてください、放っておかないでください」と母親に依存してしまうようになるのが「マターナリズム」ということである。

このようなシチュエーションは、私達が住む現代社会に往々にしてよく見かける現象である。このような日常茶飯事的行為を、またこの悪循環を、私達が感情的批判として捉えず、基本的古典的思想に基づいて捉えるための知識をもたらしてくれるのが、この本の魅力である。私は、生きていくために必要なものは教養だと考える。教養があるのとないのとでは、人生を生き抜くのに大きな差があると信じている。そういう意味において、この本は多大なヒューマン・スキルを読者に与えてくれるに違いない。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 耳野 健二

原著は、そのタイトルとは裏腹に、受験用のたんなるハウ・ツー本ではなく、むしろ現代の哲学・倫理学等についてのかなり本格的な概説書である。原著者も多彩で活発な評論活動で知られている。

書評は、全体として、文体・内容ともにバランスよく明確に書かれた秀作と言える。とくに前半部は、書評者が感じた本書の魅力が生き生きとつづられており、読み応えがある。その一方で、後半部、「愚行権」を説明する段落以降、叙述がやや平板になったのは残念だった。

愚行権の部分を取りあげるなら、それがわたしたちの生活にどのようにかわり、どのような意味をもち、それに対して書評者自身がどのように感じるか、といった点がもっと具体的に展開されてもよかったように思う。

哲学や倫理学の学説が生きる上での「ヒューマン・スキルを読者に与えてくれる」とはどのような意味なのか。難しい問題ではあるが、この点こそ本書に関心をもつ読者が最も知りたいと望む点ではないだろうか。

しかしながら、一般に哲学や倫理学が敬遠されるなかにあって、このような書物に取り組み、それを真摯に受けとめようとする姿勢は高く評価されてよい。さらに読書と思索を積んで考えを深めていって欲しい。

受賞者から一言



1回生というこの時期に素敵な賞を頂いて、これから頑張る励みになりました。



書名：『日本縮小：

ダウンサイジング社会への挑戦』

著者：朝日新聞社経済部編

出版社・出版年：朝日新聞社，2004

<http://opendoors.asahi.com/data/detail/1804.shtml>

「人口問題を考えてみる第一歩目として」

本書はそのタイトルが示す通り、近年の日本における人口減少について、少子化問題や高齢化問題について書かれている。しかしながら、人口問題とは多くの場合、その規模が日本という国を指して話される場合が殆どであり、私たち学生が想像しその危機感を実感することはとても容易ではない。少子化・高齢化社会ということで年金問題にも多く触れられているが、これも私たち学生は自ら働いて得たお金を納めているわけではないし、殆どの学生は特別控除を受けているだろう。確かに問題ではあるのだろうが、実感が湧かない。だから、関心が薄い。先日行われた衆議院解散総選挙においても、学生同士で話に上がるのは専ら郵政民営化の是非についてであり、新聞メディア等の社説で「今回の選挙の争点は郵政民営化だけではなく、年金問題や景気対策等にもしっかりと目を向けなければならない」と書かれているのを読んでも、やはり話題となっていて連日報道されている反民営化対刺客といった構図の方ばかり追いかけてしまっていた。そこで是非読んでみたいのが本書である。

勿論、人口問題についての書籍なのだから、様々な統計数値が並び、国家財政の危機を伝えるために巨額のお金についての記述もあり、読み辛く感じる部分もあるだろう。しかし何が面白いかと言えば、このまま人口減少が加速していった場合必ず迎えるであろう数十年後の日本が仮想未来像として描かれていたり、この少子化・高齢化の波にあおられた様々な企業が如何にしてその厳しい状況を好機として変換しているかが示されている点である。

例えば、本書の初めには、2043年に日本の総人口が一億人を切り、GDP成長率が十年連続でマイナス成長となった仮想未来が描かれている。いわゆる「団塊ジュニア」世代が定年を迎え、年金受給世代が全体の3分の1にまで達し、人口減少とそれに伴った財政負担によってバブル期に建てられた高層マンションへの入居者は激減し、街はゴーストタウンとなっていくといった内容である。このようにまるで小説の中の世界であるかのような衝撃的な未来像を突きつけられた後、具体的な試算値を提示してこの未来像がただの絵空事ではないことを示していくのである。読者は、40年後にそのような事態に本当になるのかと、普段ならあまり読みたがらない各種グラフや数値の羅列にも興味をそそられざるを得ない。

また、更に興味を引くのは、人口減少とともに顧客が減っていく、あるいは今までターゲットとしてきた顧客層が薄くなっていくといった現状で多くの企業がどのような苦境に立たされているかという記述である。例えば、生命保険業界では、主要各社の契約高は1996

年をピークに減少が続いている。主な原因として低金利や株価の低迷などが挙げられて、更には働き世代の減少がマーケット自体の縮小に繋がっている。これまで、日本の主要生命保険の主力商品は子育て世代を中心に「もしも」の時の備えを提供する死亡保険であった。それがこの人口変動によって大將人口が減り、立ち行かなくなる危険性が出てきたのである。生命保険業界に限らず、このような苦境は他の業界でも多々みられる。特に従来、若者をターゲットとしてきた業界、具体的にはコンビニエンスストアや携帯電話、テレビゲームといった業界もそうである。

しかし、これらの業界は本当にただただ業績が悪化しているだけなのだろうか。記述を鵜呑みにせず、疑問を持って調べてみると、そうではないことが分かるだろう。近年では高齢者向けの商品やサービスが沢山供給され、高齢者という新しい顧客層の需要を取り込むために試行錯誤を行っている。例えば、とあるコンビニは、60代70代の俳優や女優をCMに起用し、「コンビニは私たちにこそ便利だったのだ」というコピーを打ち出して高齢者層の利用を促した。それに伴い、商品も高齢者向けのものを新たに多く開発した。携帯電話では、「説明書の要らない携帯」として過剰な機能を一切無くして高齢者でも扱いやすくした商品が異例の業績を上げている。生命保険業界では高齢者でも加入しやすい商品を多く提供し、ゲーム業界では子供だけでなく大人も楽しめるハードやソフトを発表している。

このように、普段「人口減少問題」というととてつもなく規模の大きな話でなかなか取っ付き難い問題であるが、本書ではそれを経済や企業と結びつけることによって私たちの生活に密着させたり、これから先にこのままだとどうなるかを仮想未来として描いたりして読者の興味を掻き立ててくれるのである。選挙熱が未だ覚めやらぬ今、日本という国について考える絶好の機会に、その日本において最大級の問題である「日本縮小」について、本書で基礎知識を得て考えを深める第一歩目にしてみてはいかがだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 佐々木 利廣

対象図書は、日本縮小という題名からも伺えるように、超少子高齢化社会のインパクトと現場での取り組みを取材した朝日新聞の連載「ダウンサイジングにっぽん」を大幅に加筆訂正したものである。とりわけ書評者の目にとまったことは、様々な統計数値を駆使して描かれた日本の仮想未来像である。とりわけ、人口減少、全体の3分の1を占める年金受給世代、ゴーストタウン化などの負の衝撃的未来像だけでなく、そうした危機的状況を好機と捉え果敢に挑戦している企業や自治体の現場の姿を書評のなかで表現しようとしている。その試みはある程度成功しているといえる。とくに学生の想像の枠を超えた人口減少問題というテーマについて、その射程の広さや奥行きを深さを実感として理解するなかで、このテーマの面白さや難しさを他の人にも知ってもらいたいという意気込みが伝わってきた。

少子高齢化による需要や市場の縮小に対して、生保業界、コンビニ業界、携帯電話業界、テレビゲーム業界が高齢者市場を新たに創造しつつある現状を説明している後半部分は、ダウンサイジング社会への挑戦として捉えようとする書評者の主張である。しかしキーワードとして提起された日本という国の戦略的ダウンサイジングについて、書評者がどのような意見をもっているかについては十分な説明がなされていない。さらに曖昧な日本語表現、漢字の表記ミス、変換ミスなど体裁面で気になる箇所が見られた。やや荒削りの部分もあるが、時流に乗らず日本という国の未来を考える一助として本書を推薦したいという書評者の深い思い入れが審査員の評価に繋がったのではないかと。

受賞者から一言



元々本を読むことは好きで、読んだ本が面白かった時は友人に薦めることが良くあるのですが、まさかそれがこのような賞を頂けることに繋がるとは思ってもみませんでした。自分が興味を持った事柄を、どのような言葉を使って、如何に相手に共感してもらうか。今回の原稿作成に取り組んだことで、その難しさを改めて感じました。



佳作

文化学部 4年次生
くすはらしんべい
楠原 慎平



書名：『無情の世界』

著者：阿部和重

出版社・出版年：新潮社，2003

阿部和重の物語は、いやというほど現代的で、リアルだ。インターネット、少年犯罪、フリーター、ストーカー、ファミリーレストラン... 現代社会のキーワードがたくさん盛り込まれている。現代的というより、現代そのものが描き出されているようだ。しかし、事物や事象が現代的なものだからそうなのではない。そこにいる人間こそがリアルに描かれているからだ。『無情の世界』には、短編3作品『トライアングルズ』、『無情の世界』、『塵』が収録されており、それぞれ小学生、中学生、フリーターの青年が物語の中心人物に設定されている。小学生に付きっきりになって教える家庭教師は、実は小学生の父の愛人に忍び寄る偽教師。性に狂い始めた中学生の父は変態殺人者。墮落した生活を送り社会をなめている青年やハイテク機械で妻を監視する男。子どもであれ、大人であれ、ちょっとした歪みがあれば非常識の世界へと陥ってしまう。『トライアングルズ』の小学生といい、『無情の世界』の中学生といい、彼らはその話し方や考え方から見て病んでしまっているといえる。最近の多発する少年犯罪を連想してしまうような彼らだが、大人だっとうかうかしてはられない。『塵』のファミリーレストランに登場する男は、甲斐性がなく、妻の浮気の決定的証拠をつかんでおきながら、どうすればそれを解決できるか、自分が何をすればよいのかわからないまま、妻の浮気現場を盗撮して覗こうとしている。拳銃の果てには、腹を立てて妻と浮気相手をバットで殴りまわす始末だ。

誰もが皆、頼る相手がいないのがおもしろい。皆人生に関わるような危機を迎えているのに、助けてもらえない。他人にかまう人はいないのだ。世間は他人には無関心で、人と人との関係が疎になっているのが現代の日本だというかのよう。

希薄な人間関係は物語の中だけではない。『無情の世界』は、物語かと思えば、実は主人公がインターネット上で公開している文章である。読み手の私達でさえ、実は完全な第三者、傍観者になるしかなくなってしまう。私達まで他人になることを実践させられているのである。

助けてくれる人がいない、助けてあげられない、救いようのない物語だ。しかし、それは、現実社会を投影している物語で、私達も紙一重のところまで彼らが巻き込まれたような災厄に耐えているだけかもしれない。なぜなら、彼らが泳いでいるのは、リアルに再現された私達の社会なのだから。

『塵』の最後に、万事休すの青年の頭に流れる外国の女の歌は、皮肉にもこんな内容だ。

やたらと先を急いだときが / 私にもあったわ / ちょうど今のあなたのように / 自分の意見をいわずにはいられない / そんな日もあったわ / ちょうど今のあなたのように / あなたの機嫌を損ねるつもりはないの / ただ少しペースを落としてほしいだけ / 穏やかな気持ちになったことはないの? / 自分の中に / 安らぎを見いだそうとしたことはないの? / 歌を口ずさんで / 幸せな気持ちになったことはないの? / ほかの誰かを / 力づけてあげたことはないの? (207 ページ『塵』より)

皮肉られているのは、この青年だけではないだろう。物と人が溢れ、物と人がかみ合わない現代日本と、そこで流されて生きている日本人への警告だと感じる。時間は分刻みで計算し、少しのロスも許されず、死ぬまで働く者までいる。ギリギリの国だ。そんな張り詰めた状態だから、すぐにキレル、狂ってしまう。日本はどんどん発展しているが、人はついていっているのか。阿部和重が物や数値やデータを書くと、それは仔細にまで及んでいる。まるで物の存在が人間の存在をおびやかしているようだ。

中国人のナショナリズムを説いた魯迅の『阿Q正伝』を思い出す。自身の出身地を舞台にした作品も多い地元好きな阿部和重は、きっと日本だって大好きだろう。『阿部正伝』は日本を変えられるか。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 河原 省吾

文学作品の書評はたやすくない。それに取り組んだことを評価したい。

なぜ、たやすくないか。それは、作品を外側から評するだけでは不十分で、内側からの読みが大切だからである。書評者はこの本の登場人物を「最近の多発する少年犯罪を連想してしまうような彼らだが」と述べている。この感覚は正しい。だから、もう少し立ちどまって掘り下げてほしいところである。なぜなら、これらの登場人物はなるほど病んでいるかもしれないが、同時にとても興味をひく人物であり、それがこの本の魅力だからである。読者は、嫌悪感をいだきながらも一気に読まされてしまう。これらの人物の動きにどこまで沿えるかが、このような本に向き合うときに鍵となる。

歌の引用や最後の段落は、余分である。鋭い着眼のできる書評者なので、作品との向き合い方をさらに鍛えてほしい。

受賞者から一言



記念すべき第一回目の入賞作品に選ばれたことをうれしく思います。

この書評は、阿部和重に敬意を払うためと、彼の本が呼び覚ます自分の欲求不満を解消するために書きました。書評大賞が募集され始めた頃、ちょうど阿部和重の本にのめり込んでいました。彼の本を読んだ時に起こる、もやもやとした、しかし刺激的な感情を誰かに伝えたい!とっていた矢先の募集でした。

楽しく書くことができたので、また機会があれば書こうと思います。



書名：『身体感覚を取り戻す：

腰・ハラ文化の再生』

著者：斎藤孝

出版社・出版年：日本放送出版協会，2000

「『身体感覚を取り戻す：腰・ハラ文化の再生』を読んで」

最近地下鉄に乗っていて、気になる光景を目にすることが多くなった。それは、制服を着た中学生や高校生が駅のホームの地面にべったりと尻をついて座り込んでいるという光景である。この路線は7分間隔で運行しているので、ホームに下りてから電車が来るまでの待ち時間は、わずか数分しかない。つまり彼らは、電車を待つ間のたった数分間でさえ、立っていることができないのだ。しかも、このような若者が各駅に数人は必ずいるのである。

いったいなぜ、彼らの体力はこれほどまでに衰えてしまったのだろうか？

本書の著者である斎藤孝氏は、その原因を「身体文化の断絶」にあると指摘する。身体文化とは、人間が日常的に行う、立つ、歩く、坐る、息をするなどの動作を、どのように行うかということに関する文化である。身体文化は民族や国によって違うので、アメリカ人にはアメリカ人特有の立ち方や歩き方や坐り方があり、日本人には日本人特有のそれがある。とりわけ日本では、腰とハラを体の中心と考え、日常生活や労働、教育の中で自然に腰とハラが鍛えられていく、腰肚文化が培われていたのである。

ところが、そのような身体文化が、明治維新や戦後の生活の欧米化によってわずか100年のあいだに大きく変質してしまったというのだ。

たとえば、「立つ」という動作一つとっても、現代の日本人と過去の日本人では全く異なる立ち方をしている。現代の日本において「正しい姿勢」とは、胸と肩を張り、全身を硬直させる、いわゆる「きおつけ」の姿勢であるとされている。事実私も、小学校、中学校、高校と通して、体育の授業などでこの「きおつけ」の姿勢をよく指導された覚えがある。それに対して、過去の日本人は、膝を軽く曲げ、上半身、特に肩と胸の力を抜き、背筋をピンと伸ばし、重心を下腹部に落としてどっしりと構える、「上虚下実」の姿勢をとっていたのである。

実際にこの姿勢を試してみると、足はどっしりと地に付き、上体はすっかりリラックスして、非常に安定した状態で立つことができるのがわかる。この姿勢なら、だれかに押されても、簡単には倒れないだろう。

この他にも、本書では歩き方、坐り方、息の仕方などのさまざまな身体文化が実例や写真を交えて紹介されているが、昔の日本人の身体に対する意識の高さや身体の使い方の上手さには、ただただ驚かされるばかりである。写真に収められている過去の日本人は、今

の日本人とは同じ民族であるとは思えないほどに、美しく立ち、美しく坐り、美しく働いているのだ。

では、このようなすぐれた身体文化を現代の日本人が取り戻すには、どうすればよいのだろうか。著者が本書で述べているのは、自分の身体を意識することの重要性である。われわれは普段、立ったり、歩いたり、坐ったりという動作を、無意識的に行っている。だから、そのような動きを修正する場合には、いったん、無意識の動作を意識化する必要がある。過去の日本においては、この無意識的に行っている動作を意識化するための仕掛けが、さまざまに存在していた。それは、和服、草履、武道の鍛錬、雑巾がけ、子供の相撲大会、古典の音読など、日常的な生活の中に自然な形で組み込まれていたのである。

しかし、現代日本においては、そのような仕掛けはほとんど失われ、われわれは欧米化された生活様式の中で、自分の身体を意識する機会の無いままに、日常生活を送っている。そのような身体に対する無関心が、冒頭で述べたような中学生や高校生の体力の低下や、生活習慣病の増加などを引き起こしているのであれば、これは、われわれの健康や日本の将来を担う子供たちの健康にとって、重大な危機である。

過去の、日本人が培ってきた優れた身体文化を子供たちに伝えるためにも、われわれは一度歩みを止め、本書を手に取り、じっくりと自分の身体を見直してみる必要があるのではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 河原 省吾

たくさんの本を著し、理論と実践を重層的に展開している斎藤氏の基本書ともいえる本である。書評者は、内容の多いこの本を手際よく紹介している。具体例も挙げられていて、わかりやすい。

この本は驚きに満ちた本である。書評者も、「昔の日本人の、身体に対する意識の高さや、身体の使い方への上手さには、ただただ驚かされるばかりである。」と述べている。しかし、私には書評者がそれほど驚いているとは感じられなかった。書評者は、中学生や高校生の体力の低下や生活習慣病の増加などの問題を取りあげて、この本の意義を強調している。伝わってきにくいのは、書評者はこの本を読んで、自分の身体を見直してみて、姿勢も試してみて、いったい何に気づいたのだろうかということである。この点での驚きをもっと書きこまれば、いっそう迫力のある書評になるであろう。

受賞者から一言



この本のすばらしさをお伝えすることができて、とてもうれしいです。今後も、日本の伝統的身体文化や、いろいろな身体技法等について、積極的に学んで行きたいと思っています。



書名：『自閉症裁判』

レッサーパンダ帽男の「罪と罰」

著者：佐藤幹夫

出版社・出版年：洋泉社，2005

この本と出会い、初めて本は真実をよりリアルに伝えてくれるものだと思った。今までこんなに考えさせられた本があっただろうか。法律に関する授業の一環としてこの本を読み、300ページ以上ある本をたった2日で読み終えた。そして読み終えた後、私は喜怒哀楽が混じりあった何とも言えない気持ちになった。

この本は、数年前浅草で起きた通り魔事件についての公判記録や被害者・加害者両者の生い立ちや生活、どんな人間であったのかを書き記したものである。犯行時、犯人はレッサーパンダの帽子を被っており、被害者の女性と「友達になりたかった」という動機で面識のない1人の若い命を奪った。当時この異常な事件は大きな話題を呼び、私自身もニュースを見て衝撃を受けた。しかし加害者がどんな人間なのか、どのような人生を歩んできたのかなど知ろうともせず、ただただ変わった人間だと思っていた。ましてや犯人が「自閉症」という精神障害を持っているということなど思いもしなかった。

「自閉症」……聞き覚えはあるが、実際にこの精神障害を理解している人は少ないであろう。この事件はこの「自閉症」という精神障害を持っている加害者に対して、どのような判決が下されるのかという一種のチャレンジケースであり、これからの日本の法律解釈を変える上で大切な裁判であった。筆者自らが、裁判の傍聴に出向いており、詳細な公判記録を残している。また、被害者の遺族、加害者の家族と会い、両者の思い出や相手に対する思いを直に聞いている。このとき、両者とも怒りや憎しみよりもやり切れないという思いを筆者に痛烈に語っており読み手もその思いを痛感するであろう。

一般的にこのような通り魔事件は、加害者は100%悪で被害者は100%善である。この事件に関してもこのことに間違いはないのだが、彼の今までの不幸に包まれた人生や、他の人間よりも純粋で感受性が強いゆえの行動であったということを読み進め、明らかになるにつれ、ただ一言にこの犯人は最低で変人で生きる価値もない人殺しだとは思えなくなってくる。そして、この本には、人殺しとは思えない孤独な寂しい人間像が浮かび上がってくるのである。

期待された判決結果は「加害者は精神障害無し」というものであり、このチャレンジケースは新たな法律の歴史をつくることはなかった。精神障害という責任能力を満たさない加害者の事件は今後どうなっていくのだろうか。また責任能力が満たされないからという理由で減刑をしてもよいものだろうか。被害者・加害者両者、またそれを取り巻く全ての人が納得できる裁判など出来るはずもなく、このやりきれないジレンマがこの事件で改

めて浮き彫りになると同時に、加害者本人の発言や意思を圧迫させ強引に取り調べを進める現在の警察組織に対しての怒りがわいてくるであろう。

この『自閉症裁判』、ぜひ法律に関わる人だけに留まらず多くの人々に読んで頂きたい。そして、責任能力の範囲についてや取調官の対応など、法律の疑問点や今の日本の現状を肌で感じ取って欲しい。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 耳野 健二

全体として、原著の内容をまっすぐに受け止め、自らの感じたことを素直に表現しており、読者に原著への興味を掻き立てることのできる、みずみずしい一編に仕上がっている。

他方、書評者の主観的な感想が前面に出すぎている憾みもあり、書評という観点から見れば、書物の長所・短所についての客観的な分析がもう少しあってもよかったように思う。とくに社会的・法律的背景に関する問題は、ある意味では本書の核になる論点であるから、もう少し突っ込んだ記述があっても良かったのではないだろうか。

文章は生き生きとよく書けていると思うが、よく見ると生硬さが残っており、この点でも工夫の余地がある。しかしこの点については、原著からの感動があまりに強く、思いを一気呵成に吐き出さずにはいられなかったが故の硬さであり、この点、むしろ原著の深みを伝える効果をもったものとして好意的に評価したい。

佳
作

受賞者から一言



まさか佳作に選出されるなどまったく思っていなかったので、嬉しさと驚きでいっぱいです。日頃から様々な分野の小説を読むのが好きなので、今後もたくさんの本を読み、表現方法や文章の組み立て方、知識など、自分の糧としていきたいです。やったー

日本語の表記法をまとめた本

- 朝日新聞の用語の手引 / 朝日新聞社用語幹事編
朝日新聞社 , 2005.5 816.07 || ASA | 2005/2006
2 階参考図書
- 読売新聞用字用語の手引 / 読売新聞社編著
中央公論新社 , 2005.2 816.07 || YOM 2 階
- 記者ハンドブック : 新聞用字用語集 / 共同通信社編著
第 9 版 共同通信社 , 2001.3 816.07 || KYO
2 階参考図書
- 日本語の正しい表記と用語の辞典 / 講談社校閲局編
第 2 版 講談社 , 1992.11 813.5 || KOU 地下 1 階





書名：『立法過程』

著者：岩井奉信

出版社・出版年：東京大学出版会，1988

<http://www.utp.or.jp/>

先日の衆議院選挙は、296 議席獲得という自民党の圧倒的勝利に終わった。連立与党、公明党のそれと併せて 330 議席に迫るとなると、当然、国民の多くが、「独裁」とまで行かないとも、自民党、小泉総理の思うまま議会運営がなされるのではと思う。では実際に、議会運営はその様に進むのであろうか。

かつて、自民党が 300 議席を超え、極めて長期的にわが国の与党を占めていた時期があった。いわゆる 55 年体制である。『立法過程』は、1988 年、竹下登が改造内閣をスタートした、そんな自民優位の時代に書かれたわが国初の政治学叢書である。確かにその時代と今日では、選挙制度や与野党の関係など異なる部分も少なからず存在するが、だからといって、本書によってその二つの時代を比較してみることは、ドイツのビスマルクの「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という名言を持ち出すまでもなく、決して無駄な行為とは言えない。

著者の着眼点は、政治学者らしい、一貫して印象論に囚われない、データ重視のものである。それは、ともすればマスコミの報道を全面的に信用してしまいがちな我々への警笛となっていて、本著は今でも新鮮味を保っている。

本著で取り上げられる例を紹介する。与党と野党は、報道されるように、政策について常に対立している訳ではない。寧ろ、協力的に審議を進める数が非常に多いというものである。これは、マスコミが与野党全面対決の審議を多く取り上げるために感じる錯覚である。

野党の多党化故、野党は利益誘導のために、消極的行動（閣法や自民党提出法案に反対し、廃案を目指す活動）だけではなく、与党の妥協を引き出し、法案を修正させる積極的行動が必要となり、そのため、全野党が反対する法案の数はほとんどないとすら言える状況にあるのである。

それにも関わらず、マスコミが与野党対立の審議を大きく取り上げるのには理由があり、一つはマスコミのイデオロギー的なものであるし、また、もう一つは、マスコミがわが国の争点明示機能を担っているということである。

また、現在道路公団をはじめとするいわゆる族議員の考察を、わが国の官僚制を下地として行っている。これについても、与党だけの問題と捉えがちであるが、実は野党にも関わりがあることが述べられる。また、現在の問題になっている事柄がいかんして発生したのかを知る上で役に立つといえるし、この時代から官僚制についてこれだけの分析を行っているのは流石といえる。

先ほど法案修正の話が出てきたが、これは冒頭の問題定義を説くヒントになる。

本著が取り上げるテーマの一つに、「野党の法案に対する影響力」というものがある。また、議員の活動動機などを海外の政治学者の発表に求めた。それらによれば、自民党一党有利の状況であるが故に立法過程にさまざまな制約を受け、また、野党は、少数派の代表として、法案に修正というかたちでその影響を反映させることができるという。その方法等は、本著のトレースになるので避ける。本著を一読願いたい。

本著は政党の統廃合が数多く行われる前のものであり、政党分析に関しては、多少の古さがあることは否めない。また、イデオロギー色が政党の行動決定に影響を与えると主張し、但しイデオロギー色は今後薄れていくとの主張は、今日を見るに必ずしも正解とは言えない。

ここで冒頭の問いに戻れば、議院運営は、その権力をもってすれば一党独裁的な政策を行うことは確かに理論上不可能ではないが、近代、特に戦後のわが国の国会を鑑み、また、その立法過程を考えたとき、極めて難しいといえる。ただ、小泉総理は良い意味でも悪い意味でもこれまでの常識を覆す所があるので、この時代とどの程度的一致を見せるのか、あるいは乖離するのか、今も研究を続ける著者ととも政治眼を養い注目したい。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 耳野 健二

原著は、国会を主たる素材としつつわが国の立法過程を体系的に分析した書物である。

書評者は、本書を近年のわが国の政治状況にも触れつつ、内容上のポイントの紹介と論評をおこなっている。全体として堅実な内容の佳編である。

しかし全般的に論理の展開に甘さが見られ、散漫な印象を受ける点は残念である。たとえば、官僚制について「これだけの分析を行なっているのは流石といえる」と高く評価しながらも、その具体像を明らかにしていないため、原著の行き届いた叙述の豊かさや鋭利さがいまひとつ伝わってこない。他方、ともすれば敬遠されがちな政治的な素材を扱った地味な学術書にチャレンジし、読み込み、興味深いポイントを取り上げてある程度要領よく紹介した手腕は評価されてよい。過去の経緯を踏まえながら現在に対する「政治眼を養う」という考え方にはまったく同感であり、書評者のさらなる研鑽に期待したい。

受賞者から一言



今回、佳作を頂いたということで、数ある中から私の拙書評を選んでいただいた審査員の皆様には心より深く感謝致します。本を読み、またそれについて評することは、活字離れが叫ばれる今日にありまして、より一層の意義があると思います。私事では、この学校に来まして初めて評価された気分で、嬉しく思っております。最後になりますが、このような機会をご連絡頂き、投稿を勧めて頂きました須賀助教授には、改めて感謝申し上げます。



佳作

 秋田 まどか

あき た

 書名：『なぜノキアは携帯電話で
世界一になり得たか :
携帯電話でIT革命を起こす』

著者：武末高裕

出版社・出版年：ダイヤモンド社，2000

「失敗からの学習」

戦後、生き残るために生まれた日本の技術は世界に真似できないほどになった。日本の技術水準の高さや品質の良さは今や世界に誇ることができる。技術の発展が進むと同時に、日本社会はあらゆる顔を見せてきた。高度経済成長期を経て、バブルの崩壊、経済不況と日本の景気は下降路線をいくばかりになった。最近は景気回復の兆しが見えたというアナリストもいるが、一般大衆にはなんの手ごたえもないというのが現状である。

「開発は先の見えない夜行列車。知恵と度胸で突き進め」という名言がある。この言葉を残したのがトヨタ自動車です。初めてクラウンを開発した故・中村健也氏である。彼は国産乗用車の開発主査であり、戦後相次いで海外企業と提携していく日本企業の傍ら、日本独自の国産乗用車の研究開発で成功を修め、その利便性を実証した人物である。その後も低燃費を実現するための研究を何十年も前から推し進めてきた結果が今話題のハイブリッドカーにあたる。こうした長期的研究開発の取り組みは、将来的に成功するにしても、失敗するにしても、企業にとってプラスにつながると考えることはできないだろうか。なぜなら、それは「無駄」と考えることはできないからである。たとえ失敗しても学習という点で大きな成長と捉えることができるからである。

過去の失敗から学ぶというスタンスで今や世界を代表する企業がある。世界で携帯電話市場シェア首位のノキアだ。本書はノキアのサクセスストーリーを書き綴っている。ノキアは、フィンランドの会社であり、元はゴム長靴、紙パルプなどの伝統事業を担っていた。ノキアはさらに、ノキア存在を確固たるものにしようとする事業を買収する。しかし、ノキアの買収戦略は経営不振を導いたのである。不採算部門が増加し、さらにはフィンランド経済の不況で経営存続が危ぶまれた。この解決策として、ノキアは携帯電話、通信インフラ事業を除くすべての事業を売却するに至ったのである。これがノキアの選択と集中の戦略といわれるもので、当時のCEO・ヨルマ・オリラは「大事なことは企業の大きさではない、スピードこそ鍵である」といい、事実彼はそれを証明した。仮にノキアがこの戦略をとっていなければ今日のノキアはなかったであろう。

ノキアに好機をもたらしたのは通信の自由化である。ノキアがなぜ世界で勝てる企業になったのか。それはノキアに残された携帯電話、通信インフラ事業の将来性が当たり、その分野の知識が蓄積されていたからである。また、その知識や技術はまだニッチであった携帯電話をヨーロッパ市場に投入し競争力を培っていたため、世界に進出しても競合企業

に劣ることがなかったのである。携帯電話の生産台数が急速に増加する中でも、ノキアはいち早く生産や流通の見直しを図り改善してきたのである。

しかし、ノキアの日本でのシェアはかなり低い。理由は、日本でノキアを知る人が少ないためである。それは、日本人の消費性向が特異であり、日本市場が世界から孤立しているからでもある。日本では携帯電話のモデルチェンジが早く価格は次第に低くなる。ヨーロッパでは、単に機能やデザインが重視されモデルチェンジのスピードは期待されていなかった。このため、ノキアは生産国が遠いことや流通面でのスピードに関して日本メーカーに追いつくことができなかつたのである。また、規格の問題も重要で日本と海外では全く異なっていたのである。つまり、ノキアのグローバル戦略は日本で通用しなかつたことになる。しかし、なぜノキアが日本市場から撤退しないのかというと、それは日本が最先端をいくモバイル社会だからである。ノキアは将来的な視野をいれ、常に学習しているといってもいい。

この著書は、ノキアの成功から現在に至るまでのくぐり話が語られているが、それに加え、著者のシリコンバレーにおける取材をはじめとする数多くのノキアの携帯電話事業に関する人々の当時の話が面白い。この取材から感じられることは、ノキアの経営スタイルは人を大事にするということである。ノキアは失敗から多くのことを学んだ。このノキアの失敗は、しかし、人を首にはしない。日本では事業領域の縮小は人員削減が当たり前のようになっているが、ノキアはリストラを行わず人を大切にする。なぜなら人の数だけアイデアがあるからだという。最近では日本も少子高齢化でやっとな人的資源に気付き始めた兆候がある。

企業の課題として、企業は先を見据えて行動することを常に考えておかなければならない。研究開発だけでなく社会の動きという点でもである。人は失敗を恐れては前に進めないことくらい幼少時代に教わっているはずである。大切なのは、揺るがない意思にどこまで誠意をもって取り組むことができるかである。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 佐々木 利廣

小国フィンランドの無名企業が、ヨルマ・オリラ社長の「事業の選択と集中戦略」により携帯電話市場の覇者に登りつめた秘密を明らかにしようとした図書である。本書出版の後、相次いで類書の翻訳書が出版されており、現在ノキアブームの感を呈している。タイトルからもわかるように、書評者は失敗による学習のケースとしてノキアを考えているが、どのような失敗がその後の学習に繋がったかについては明らかにしていない。買収戦略による不採算部門の増加、日本市場でのノキアの劣勢をノキアの失敗と考えているようであるが、それがノキアの学習にどのように繋がるかについて言及してほしい。さらに2000年以降の類書との比較のなかで、ノキアの成功と限界について考えてほしい。また日本語表記や文体など体裁の面で間然する箇所がないわけではない。いずれにしても、日本ではまだ馴染の薄いノキアに注目し、選択と集中という戦略論と失敗からの学習という組織論の視点から書評にチャレンジするという意欲と努力を評価したい。

受賞者から一言



すばらしい賞をいただきたいへんうれしく思います。どうもありがとうございました。



書名：『北京：胡同に生きる』

著者：NHK「アジア古都物語」プロジェクト編

出版社・出版年：日本放送出版協会，2002

「北京の指紋」

グローバルズムという言葉がもてはやされる現代では、洪水のような世界「単一化」の流れが押し寄せてきている。その影響で北京の伝統文化、民族特性、建築様式がだんだんこの時代の変遷に埋もれつつある。北京古都の姿を描いている『アジア古都物語・北京』では、胡同を背景にしてそこに生きている人々の生活という視点から、北京の歴史・文化・飲食・建築について述べている。中国・北京に興味をもっている人ならばこの本を読み込んでいくわけであるが、そこに住む人々の目線と供に読めばゆっくりと「老北京」を味わうことができるだろう。

本書では四百年以上の伝統芸を受け継ぐ「廠甸廟会」の復活からオリンピックの開催による北京史上最大規模の再開まで、伝統の継承と新北京の開拓の対比になにか悲しみが潜んでいる。各章のはじめに専門家の「Asian Talk」という北京の歴史に溯る話をはさんで、北京の歴史的な根源を読者に伝える。これも、北京の歴史を深く知るための材料だろう。

北京は、中国の首都として三千年の歴史を持っている。商業の中心地として東京、パリ、ニューヨーク等の大都市と同様に、にぎやかな近代都市である。しかし、大都会はそれぞれ特徴をもっている。「それは人間の指紋と同じだろう。北京の指紋はいうまでもなく、人情味あふれる細長い灰色の胡同である。」「アジア古都物語・北京』では、胡同の奥に足を踏み入れたいろいろな登場人物によって北京人の血の通った生と直につながっている伝統を紹介している。特に愛新覚羅溥傑（清朝最後の皇帝溥儀の弟）が皇族にもかかわらず登場していることは、昔の都としての北京胡同のすばらしさを感じさせる。

古い北京の胡同には多彩な文化が隠れている。今日、庶民に受け継がれた「コオロギの闘い」という遊びは、皇帝の愛した遊びであった。メンツをかけて闘うコオロギの姿、それから闘いに勝利した時のあの力強い透き通った鳴き声を描写するのは皇族の権威を暗喩しているのではないか。

そして、ここ数年の北京の大規模開発によって、古都北京に眠っていたさまざまな物が市場に流通するようになってきた。皇帝が使っていたと思われる品など、これまでまったく目にすることがないような物まで数多くある。世界の人々は北京の潜在力にしばしば驚かされる。骨董を愛する者は北京へ行くべきだと、本書を読み、つくづくそう思う。

本書では、老舍（中国の代表的作家）の随筆「想北平」（北平は北京のこと）を引いている。「私は本当に北平を愛している。北平は私の血中にあり、私の性質や性格の多くはこの古都から与えられたものだ。ゆりかごの中で静かに眠る子供のように、心中は完全に静

で安らぎ、求めるものもなく、恐れるものもない。北京にはにぎやかな場所もあるが動の中に静がある。どんな場所も込みすぎず、辺鄙すぎない。どんな小さな胡同の家にも庭と木がある……」という言葉からは、北京への愛着ぶりがひしひしと伝わってくる。共感を呼び、北京のことを思い出させる。本当に北京がなつかしくなると感心した。

胡同という路地は北京に特有な建築群としても時代の激流に流されていくかもしれない。古い遺跡を保護し、伝統文化を受け継ぐべきだということは『アジア古都物語・北京』の主題である。本書は人々に警鐘を鳴らしたと思う。我々の世界は多様性に富み、美しい。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 前田 比呂子

本書の内容や北京に対する書評者の深い共感や愛着が見てとれ、古都・北京の風情が読み手にもよく伝わってくる好作品である。だが、表現や引用においてやや感傷的、冗漫な部分があり、北京を襲っている大規模開発の具体例をもっと紹介するなど古き良き北京をより客観的な視点から浮き彫りにすることも必要だったのではないかと。また、「胡同」や「老北京」などの語は本書の内容や中国事情に疎い読み手には分かりづらいので、初出の箇所でも説明しておくという工夫も必要だろう。

本作品は日本語表現にぎこちない箇所が見られるものの、書評者が留学生であるという点を差し引いてもしっかりとした文章である。今回の応募作品の中では留学生の作品と思われるものは皆無に近かったが、本作品を嚆矢として、次回は留学生からも多くの応募を期待したい。

佳
作

受賞者から一言



第一回京都産業大学図書館書評大賞で佳作を頂いて、信じられないほど驚きました。今度の受賞は私にとって、日本語の勉強のゴールではありません。動力をもらって新しいスタートだといえます。安心したら、後退します。留学生として、二つの使命を負っていると思います。日本文化を勉強、母国文化を広めます。これから、日本と中国のかけ橋として自分の力を尽くしたいと思っています。

Lesson 日本語表記のルールについて (括弧類の種類)

かぎ、かぎ括弧(「」)

かぎ括弧は、会話、強調、注意を引きたい語句、引用文などをくくる。横書きでは、この場合にコーテーションマークを使用する方法がある。

(例) 被害者の女性と「友達になりたかった」という動機で面識のない1人の若い命を奪った。

二重かぎ(『』)

一重かぎの中で用いる場合や書名・雑誌名をくくる場合がある。

(例) この『自閉症裁判』、ぜひ法律に関わる人だけに留まらず多くの人に読んで頂きたい。

パーレン()

補足や語句の説明をくくる。

(例) 野党の多党化故、野党は利益誘導のために、消極的行動(閣法や自民党提出法案に反対し、廃案を目指す活動)だけではなく、与党の妥協を引き出し、法案を修正させる積極的行動が必要となり、そのため、全野党が反対する法案の数はほとんどないとすらいえる状況にあるのである。

コーテーションマーク(“ ”)

横書きにおいて、かぎ括弧や二重かぎと同じように用いる。

(『日本語表記ルールブック』日本エディタースクール出版部、2005.9から抜粋。例文は入賞者の作品から。)



佳作

いまいみお
今井美央

書名：『21世紀企画書』

日本型インターネットの可能性』

著者：橋川幸夫

出版社・出版年：晶文社，2000

アメリカの国防省が ARPAnet というインターネットの前身を開発してから 36 年。周知のとおり、もともと軍事情報戦略のためにつくられたインターネットは「簡単・便利・小型化」され、一般家庭にも多く普及し、今や現代社会と現代人の生活からは切っても切れないメディアとなった。また携帯電話をはじめ、モバイル機器の普及によって現代人の生活に深く浸透したこれらの IT 機器は「オフがない世界」を現代人にもたらしめている。「オフがない世界」、つまり、「他の何か他の誰かとつながりっぱなしの世界」の到来によって、今後 21 世紀を生きてゆく現代人のライフスタイルとコミュニケーションのあり方はどのように変わってゆくのだろうか。

そんな時代のどまんなかで、数々のメディア関係の仕事に奔走する著者、橋川幸夫が明確かつ軽快に、現代人とメディアのあり方を解き明かし、これからのメディアのあり方を指摘する。この本のおもしろいところは、ただ単に現代人とメディアのあり方について解き明かすのではないところである。「クオリティからリアリティへ」、「ニューロ系メディアからホルモン系メディアへ」、「モノ的方法論からコト的方法論へ」、「メディアのミッシングリンク」など、現代人とメディアコミュニケーションについてのコンセプトを（少し無茶なところも見られるが・・・）著者独自のユニークな視点で抽出し論じており、そのユニークで不思議な切りくちのコンセプトに妙に引き込まれてしまう。しかも、意外にも納得させられてしまうのだ。論といっても堅苦しく難解な言葉や言いまわしはあまり出てこないし、また講義形式で話がすすめられてゆくため、たとえメディア関係の話に疎い人でも気がねなく読みすすめていけるのも本書の良い所である。

上述のようなコンセプトを提示した上で、本書はさらに、日本人のライフスタイルにマッチした 21 世紀における「日本型インターネット」の可能性を探ってゆく。

では、「日本型インターネット」とは一体どういったものなのであろうか。また、日本人に適したメディアのあり方とは何だろうか。著者は「参加型メディア」と「ライブ感覚」というキーワードを軸に論を展開している。情報を一方的に上から受ける時代から、個人が情報を各々に発信していく時代に移行したのだ。つまり、現代メディアは「人間のライブな声がとびかうメディア」なのだ。著者は現代人に、そのような全く新しいメディアに対する理解と、その新しい世界での現代日本文化の構築をはじめなければいけないと述べる。

私は、この書を読んで一番重要だと思ったことは、今が到達点ではないということである。このインターネットという新しいメディアは生みだされたばかりなのだ。これが

ら、この誰もが情報の受信者であり送信者である巨大な情報システムの中に秩序を見出し、私たち日本人の手で新たな社会と自我とコミュニケーション手段を創造していかなければならないし、その創造に対する姿勢が大切であると私は考える。インターネットは皮肉にも、人類の知力の粋の結集でありながら、まだ多くの未知を残すモデルのない世界 情報の海 ではないだろうか。私たち現代人は、過去の文化や社会の軌跡を咀嚼しながら、新しい価値観をこの情報の海に生みおとしていかねばならないということを、私たちのように 21 世紀を生きていく人たちは意識・自覚していくべきではないだろうか。

この本を読むと、いかに 21 世紀のメディアを創造していくべきか、今何ができるのだろうかということを考えさせられるので、メディアに携わる人や、これからメディアとかかわってゆきたい人には是非読んでほしい。また私はインターネット文化論としてこの本を読んだが、実はこの本はマーケティングやインターネットビジネス論の本でもあるので、これからインターネットビジネスを手がけていきたい人にも読んでほしい本である。しかし、私が思うには、この本を読んで一番衝撃を受けるだろうと思うのは、軍事目的でインターネットを開発したつもりが、今や現代文化の中心メディアとなってしまったアメリカの国防省ではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 山岸 博

作品全体の構成に優れている。特に本書の内容を要約し紹介した前半部分は、やや具体的すぎるくらいはあるものの、段落間のつながりがよく、内容もわかりやすい。それに対して、第 5 段落に示された書評者の意見は、逆に抽象的なものになってしまった。本書の内容を受けて、書評者なりの意見を表明しようとする意気込みはとて強く伝わってくる。しかし、同じ内容のことを表面上の言葉を変えて繰り返しているように感じられる。このため掘り下げと展開に欠けた。また、手書き原稿のせいか誤字が多数あり、そのことが作品の質を下げた。優れた作品だけに、完成の前にていねいに辞書にあたってほしかった。さらに全体に長い文章が多いため、主語と述語の関係が乱れている。最後の文章がその典型である。

受賞者から一言



この度は図書館書評大賞の佳作に選んでいただき本当にありがとうございます。

受賞した感想としては、うれしさが半分、驚きが半分でした。私は書評を書いたのは初めてで、何をどうかいていいのかわからず暗中模索で書いたため「本当にこれでいいのか？」という疑問を今でも感じています。

書評（というか文章）を書いて一番大変だったことは、自分が考えてること・思っていること・伝えたいことをどれだけ忠実に言葉や文章にして読んでも人に伝えることができるか、という点です。特に書評では、感想文のような主観的意見と違い、できるだけ客観的かつ論理的に読む人に自分の意思を伝えていかなければなりません。まだあまりこういった文章を書いた経験のない私にとっては、とても困難なことでした。



書名：『ホーキング、未来を語る』

著者：スティーヴン・ホーキング
佐藤勝彦訳

出版社・出版年：アーティストハウスパブリッ
シャーズ，2004

イギリスにスティーブン・ウィリアム・ホーキングという学者がいる。筋肉がやせて力が弱くなっていく ALS（筋萎縮性側索硬化症）という不治の難病を患いながらも、理論物理学の世界で指折りの存在となった。マスコミは彼を車椅子の天才という。これは彼が著した本である。...と書くと語弊があるような気がする。

なぜなら、ここまでで書いたことの全てが、作中に出てこないからだ。障害を持つ作者が書くエッセイにありがちな、背筋が寒くなるような人情話も、非現実的な苦労話もない。あるのはただの論理である。最先端の宇宙論である「特異点定理」「ブラックホールの蒸発理論」「無境界仮説」などが、熱意と若干のユーモアを交えつつ、説明されてゆく。そのさまはとても知的で格好いい。

輪郭しか知らなかった知識が明らかにされていくことは楽しい。

例えば宇宙定数についてである。私が知っていたのは、アインシュタインが膨張するだけで不安定な宇宙モデルを嫌い、宇宙モデルを静的なものにするつじつまを合わせるために作ったもので、天才といえども完全ではないことを示すエピソード...というところまでだった。

しかし、この本では続きが書かれている。量子論の観点から見ると、真空中にエネルギーが存在するかもしれないので、実在する可能性が出てきたらしい。一度否定された理論が復活してくることは科学の世界ではよくあることなのだろうが、私の知っている例に該当するものがあるとは思わなかった。想像以上に科学の世界は移り変わりが激しいようだ。

おまけにその速度はかなり速い。ホーキングは作中の「ブラックホールに引き込まれた情報は消滅する」という仮説を撤回している。たった一年前に、である。論争の最前線を覗いているような気になってくる。

この本は全体的に前作『ホーキング、宇宙を語る』より分かりやすくなっている。前作が難しかった理由は序文にもある通り、前作は一本道で、簡単なものから積み上げてゆく構成であったためだろう。参考書としては最良の方法なのだろうが、段階的に難易度が上昇し、現在のものを理解しないと進めない構造のため、私のような物理学の素養が無い人間には最後まで読むことが困難だった。

今作ではこの点が改善されており、1章ごとに内容が独立した並列構成をとっているのので、多少分からない部分があっても比較的楽に読み進められるようになっている。このほかに読みやすくしようという試みが随所に見られる。解説するとスペースをとりすぎる

語句や、高度な解説が必要な語句を簡単にまとめて巻末に放り込み、ふんだんにカラーのイラストを挿入してある。その量たるや絵が入っていないページを探すほうが難しいほどで、文章だけではつかめない立体的なイメージを想起することに一役買っていた。また、物理学の本にもかかわらず、本文中に数式が全く出てこない。このことは文系の私にとってありがたいかった。そして、それらのとどめに巻末で参考図書を列挙して挑戦を促すあたり、ホーキングはこの本を啓蒙書にしようとしているのだろうか、と感じられた。

それでも難しい記述がなくなったわけではない。未だに超ひも理論や虚時間などの難解な箇所は理解の外である。とはいえ、一連の著作を読む前の彼に対する認識が「タイムマシンが作れないという仮説を出したり引っ込めたりした車椅子の学者」という程度であった私にすら、時間や空間が絶対ではないことを教え、今まで持っていた知識が常に書き換えられる可能性があることを示したあたり、この本はただものではない。読者を楽しませつつ、物理学への興味を引き出そうとした著者の狙いは成功したと言えるだろう。事実、難しい言葉や概念に頭を抱えながらも、読んでいるあいだはまちがいに楽しくったのだから。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 山岸 博

導入部分を初めとしてテンポがよく、また読み手を引き込む展開力もある。全体として読みやすく感じられる作品で、読後のすがすがしさを感じた選考委員もいる。内容の紹介にかたよりのあるが、そのことがかえって、文系の書評者が苦勞しながらも楽しく理系の本書を読んだことを想像させる。しかしこの作品の親しみやすさは、実は口語的な表現によるものである。文章のあいまいさ、段落取りのいいかげんさが目立つ。そのために、じっくり読むと、何を書こうとしているのかわからなくなる文章が多い。文章とは、話し言葉のような一過性のものではなく、何回も読まれるものである。くだけた文章でも読んで意味のわかるものになるよう意識してほしい。

受賞者から一言



受賞にも驚きましたが、その後に帰ってきた原稿の選評がとても的確で参考になりました。指摘に従い、次回までにはもう少し文章作法や表現力を身につけておこうと思います。

見てみよう！

表記に関連する内閣告示等は、一般の社会生活における国語表記の目安・よりどころとされているものです。文化庁のWebサイトに掲載されています。

国語施策情報システム <http://www.bunka.go.jp/kokugo/>

国語表記の基準として「内閣告示・内閣訓令」と「参考資料」を掲載しています。「内閣告示・内閣訓令」には、「常用漢字表」、「現代仮名遣い」、「送り仮名の付け方」、「外来語の表記」、「ローマ字のつくり方」があり、「参考資料」には、「表外漢字字体表」、「くざり符号の使ひ方」、「くりかへし符号の使ひ方」、「公用文に関する諸通知」、「法令に関する諸通知」、「外来語の取扱い」、「姓名のローマ字表記について」の資料があります。



佳作

丸尾 麻由美



書名：『きらきらひかる』

著者：江國香織

出版社・出版年：新潮社，1994

「私たちは十日前に結婚した。しかし、
私たちの結婚について説明するのは、
おそろしくやっかいである。」

(江國香織著『きらきらひかる』より抜粋)

「愛とはなんだろう。」「愛し、愛されるとはなんだろう。」そんなことを考えるようになったのは、いつの頃からか。今では思い出すこともできない。ただ、愛には様々な形があり、それは時に優しく、時に残酷な形に変化するということを、私はドラマで、本で、また、実体験で学んだ。そして、私は本書を通して、純粹すぎるがゆえに傷ついてしまうという愛の形を知った。

本書のあとがきで、江國氏は「ごく基本的な恋愛小説を書こうと思いました」と述べている。ごく基本的な恋愛小説とは、一組、或いは数人の男女が出てきて、お互いに好意も持ったり、持たれたりしながら、最後には結ばれたり、離れたりするものであると思う。そういった点で本書は、歴とした恋愛小説である。だが、決してよくあるタイプの恋愛小説ではない。

アルコール中毒で、精神不安定な妻の笑子と同性愛者で「男」の恋人のいる夫の睦月。この奇妙な夫婦が物語の主人公である。夫婦といっても、肉体関係はない。さらに言えば、恋人を持つ自由まで持つ夫婦なのである。だからといって、決して二人の仲が悪いわけではない。二人はお互いを「脛に傷持つもの同士」といい、全てを知り、許しあった上で結婚し、夫婦生活を営んでいるのである。この生活について笑子は、「ごっこみたいに楽しくて、気ままで都合のいい結婚」といっている。この結婚が世に言う「常識的」な結婚でないことは彼らも理解しているのだ。その上で「このままでいたい」と願っているのだが、彼らの周りにはいる両親や友人、いわゆる「常識的」な結婚をし、「常識的」な夫婦生活を営んでいる人々はそれを許せない。結婚し、子供をつくるということが「常識的」な幸せだと考えているからである。二人に幸せになって欲しいと思うからこそ、「常識的」な夫婦生活をおくってほしいのだろうが、それは「常識的」ではないこの夫婦にとっては重圧でしかない。

ここまで極端でなくても、私たちの生活には、常識とそれに反抗する気持ちの板挟みになり、苦しむ場面は多々ある。純粹に「このままでいたい」という二人と、それを許せない周りの人々に、思わず自分の姿をそれぞれに重ねてしまう。いつでも誠実でありたい睦月と、感情というものに対して無防備な笑子。純粹すぎるがゆえに、二人は常識に攻められ、傷つき、傷つけあってしまうのである。純粹とは、時に狂気と化す。

江國氏の描く物語の主人公は、いつも何かしらと戦っているように思う。戦う相手は、常識だったり、過去だったりするのだが、静かに、でも、激しく、彼女達は戦っている。また、主人公のみならず、物語自体が、何かに捕まらないように実際の世界と一步距離をおいているような印

象も受ける。つまり、日常生活のありふれた光景が、江國氏の手にかかると、どこか、生活感のない感じになってしまうのだ。現実の景色を水鏡でみてみると、ちょうど江國氏の描く、危うく臃げな世界になるのではないだろうか。だが、こんな危うく臃げな世界だからこそ、私たち読者はこの癖も毒もある主人公たちに感情移入することができるのだろう。

この物語は笑子と睦月の二人が、交互に一章ずつ語っていくという形で展開されている。そのため、読者は一つの物語を二人の視点で読むことができ、さらに深く、物語を知ることとなる。江國氏はよくこの手法を用いるのだが、この手法はその二人の主人公が魅力的で読者を惹きつける力を持っていなければ、成功しない。どちらかの魅力的な主人公が語る物語だけを熟読し、もう一方の物語はさらっと流して読む。それでは困るのだ。なぜなら、二人が語る、同じだけれども少し違う物語、この二つともを知ることによってようやく一つの物語、一つの世界ができていくのだから。この点で、本書は成功していると言えよう。主人公として、睦月と笑子は非常に魅力的な人物である。世に言う、常識的な人物では決してない。だが、私がこの物語を読み、二人の持つ毒の部分でさえ、なんの嫌悪感を抱くことなくすんなりと受け入れることができたのは、二人の魅力のなせる業であったのだろうと思う。

本書に出会って、純粹と狂気が背中合わせになった恋愛に思いをよせる自分と、もう私にはこんなに純粹な恋は出来ないと焦る自分と、愛の持つ、狂気じみた感情に恐れを抱く自分がいることに気づいた。私に、複雑な感情を与えたこの物語は、「愛とはなにか」「愛し、愛されるとはなにか」という永遠の疑問を再びもたらすこととなったのである。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 前田 比呂子

本小説を自分なりによく読み込んで、自らの体験に基づきながら書いている。あらすじの紹介や恋愛小説としての本書の特徴、同じ作者の他の作品群との比較、物語の構成・展開における技巧上の特色などについても書評者自身の目線で考察、整理できている。こうしたバランスの良さが、流れるような文体とあいまって、読み手を惹きつけるものとなっている。

だが、「やや感想文的な内容」、「冗漫」、「視点が明確でない」との評価もあった。今後はそうした点に留意してより幅広い読者に訴えかける作品づくりを目指して欲しい。文章の書き方に限定して特に気になった点を挙げると、読点の多用が目立つ。応募作品として提出する前に、もう一度声を出しながら何度も読み返して欲しい。レイアウトを縦書きに直してみるのもよい。

受賞者から一言



今回の受賞、とても嬉しく思います。書評を書くにあたって、今まで、何度も読み返してきた物語を、敢えて違った視点から見つめることによって、これまでは気付かなかった新たな発見をすることができました。この経験を、これからの人生に活かしていきたいと思います。

Lesson 読点(テン)について (文部省国語調査室 「くぎり符号の使ひ方(案)」より抜粋)

- 一、テンは第一の原則として文の中止にうつ。(例) 父も喜び、母も喜んだ。
- 三、テンは第二の原則として、副詞的語句の前後にうつ。その上で、口調の上から不必要のものを消すのである。(例) 調べて見ましたところ、やはり(、)そのとき申し上げたとおりでありました。



佳作

法学部 3年次生
やまざき しんじ
山崎 真司



書名：『成功への情熱：Passion』

著者：稲盛和夫

出版社・出版年：PHP 研究所，1996

「成功への哲学を学ぶ」

現在、やる気のない若者が大勢いる時代になっている。ニートやフリーターなどが代表的だ。また、大学に通っているような学生でも、日々をなんとなく生き、無駄に時を過ごしている人間は大勢いることだろう。しかし、そんな自分の状況を、「今のままでは良くないのでは」と、悩んでいる人間もまた大勢いると思われる。自分を変えたい。でも、どうすれば良いのかわからなくてやる気が出てこない。情熱が湧き上がらない。たとえ出てきたとしてもすぐに冷めてしまう。迷ってしまう。そんな人達でも迷うことなく、冷めることなく、より良い充実した人生を歩む道標になってくれるのが本書である。この本には、自分をより良い方向へ導いてくれる考え方、方程式がとてもわかりやすく詰まっている。本書の第1章「人生で成功するには」では、まさに著者自身が人生の中で成功するために学び、勉強した哲学を記してある。著者自身誰もが経験することで悩み反省しながらも自分の哲学、倫理を信じて情熱を失わずに歩んできたことがわかり、読者も共感し、勇気付けられる内容となっている。

ご存知の方も多いと思われるが、この本の著者である稲盛和夫氏は世界的大企業・京セラとKDDIの創業者である。第2章「ビジネスで成功するには」では、その創業から世界的企業へ自分の会社を導いた経験から、経営者として自分の会社を成功に導き、より良い会社へと創り上げるための経営者のあるべき姿や、考え方をわかりやすく記している。また、一問一答のコーナーではある質問に稲盛氏が答える形で記されており、それまで紹介してきた考え方の復習ができると同時に、様々な具体例を挙げて自社や自分の経験談を話しているので、飽きずに読むことができる。要点が頭に入りやすくなっている。そして、各項目における重要な考え方を太字で行間をあけて記してあるのでとても読みやすい。経営者向けの必読の法則が第1章の考え方を反映した形で第2章に多く記されているが、この本は経営者だけではなく、ビジネスマン、またこれから社会に出てゆく学生にもとても参考になる内容になっている。

この本の中で著者は、経営を行う上で最も重要なことを「PASSION」という言葉で表している。PROFIT「利益」、AMBITION「願望」、SINCERITY「誠実さ」、STRENGTH「真の強さ」、INNOVATION「創意工夫」、OPTIMISM「積極的思考」、NEVER GIVE UP「決してあきらめない」の頭文字をとったものがある。このような頭文字をとった表現は日本語でならよくあることだが、英語の頭文字をとったものは世界規模の企業らしいといえる。本のタイトルにある「PASSION」の意味は情熱が大切というだけではなく真の意味があり、その意味はこの7つの頭文字で表された言葉を含めたものであるということとても驚かされた。人生や仕事

を成功に導くには情熱が不可欠であるのは誰もが納得するところであり、その情熱「PASSION」を経営の七箇条としているのはとても覚えやすいし、上手に表現していると言える。本書の中ではその七箇条の一つずつが意味するところを、詳細に解説している。

現代社会では無神論的になる人々が増え、昔に比べ宗教的な規範や倫理観が崩れてきている。こんな現代だからこそ倫理や哲学が必要なのだが高校や大学などで自ら進んでそれらを学ぼうとする人は少ないように見える。そういうことを学ぶのをダサいと思う人もいるであろうし、難しいと毛嫌いする人もいる。多くの人がそういった分野に対して興味を持たない時代になっているのかもしれない。しかし、そのような時代になっても人間の本质は変わることがない。だから、一度は誰もが「人間とは何か」、「人生とはいかにあるべきか」などの悩みを持つ。それは、人間として基本的な悩みであり、今も昔も変わることなく探求されている問題である。その悩みが解決しないと不安になり、迷いが生まれ、上手に行動できなくなるのである。そこで大切となってくるのが倫理、哲学の知識だと言える。宗教的な規範を持たなくなっている現代だからこそ、自らの人生の指針としてより哲学を学ぶことが必要なのである。哲学から人間としての行動規範モラルを知り、強い精神力を身に付けることができる。正しい哲学や倫理を学んだ結果、情熱を支える知恵を手に入れ、日々努力し進歩していける人間になれるのである。

本書を読むことによって、著者の考える人生、ビジネスの両方における成功への哲学、方程式を学んでいける。確かな哲学を基に成功への情熱を持つことができ、その情熱を持ち続けることにより、日々努力し、行動する力が生まれてくる。それが結果として表れ、成功へとつながるのである。この本は、迷っている人、やる気の出ない人、仕事を頑張っている人、経営をしている人などはもちろんのこと、全ての人にとって有益である哲学を学べる必読の本である。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 佐々木 利廣

対象図書は、京セラ創業者で盛和塾長の稲盛和夫氏が米国企業を買収する際に相手企業のトップに説いた経営哲学や人生哲学を纏めた著書『A Passion for Success: Practical, Inspirational, and Spiritual Insight from Japan's Leading Entrepreneur』の日本語版である。若者の哲学離れや倫理嫌いを憂う書評者が、正しい哲学や倫理を学ぶことの重要性を訴える気持ちが書評文を通じて伝わってくる。法学部学生の投稿という点も評価できる。ただ書評者が、利益（PROFIT）、願望（AMBITION）、誠実さ（SINCERITY）、真の強さ（STRENGTH）、創意工夫（INNOVATION）、積極思考（OPTIMISM）、決してあきらめない（NEVER GIVE UP）のうちどの部分に共感し、どの部分に違和感を感じたかについてより積極的に論じてほしい。また松下幸之助哲学や盛田昭夫哲学などに言及した類書との比較も欲しい。最初の導入部文のパラグラフと最後の結論部分のパラグラフがやや冗漫であり、中核部分の資料紹介が少ないことも気にかかる。また接続詞や読点の使い方にも注意が必要である。

受賞者から一言



今回の受賞はとてもうれしく思います。この書評を書くことによってその本の良いところを他者へ上手に伝える難しさを知り、自分の表現力の無さにも気づきました。もっと本を読み、表現力豊かな文を書けるようになりたいと思います。

「京都産業大学図書館書評大賞」とは

2005(平成17)年度、図書館では新たに「京都産業大学図書館書評大賞」を設けました。この書評大賞には、3つの目的があります。

第1は読書活動の推進。第2は読解力や論理的思考能力、文章表現能力の向上によるレポート・論文作成能力、情報活用能力の育成。第3は書評対象図書を通じて教員・職員が学生の関心・興味を共有することです。特に日頃図書館を利用しない学生にも図書館を利用するきっかけとなることを願って創設されました。

ここに、第1回「京都産業大学図書館書評大賞」の概要を報告します。

応募総数

123名 125篇

応募要領(抜粋)

応募資格：京都産業大学の学生。ただし大学院学生を除く。

書評対象図書：京都産業大学図書館所蔵図書
応募規定：

応募作品は本人のオリジナルであり、日本語で書いたものに限る。

応募1篇につき1,500字~2,000字以内。

複数応募可。ただし受賞は1人1篇。

応募原稿は、40字×40行。手書き原稿(400字詰め原稿用紙)も可。書評の使用権は京都産業大学に帰属する。また応募作品は返却しない。

実施日程

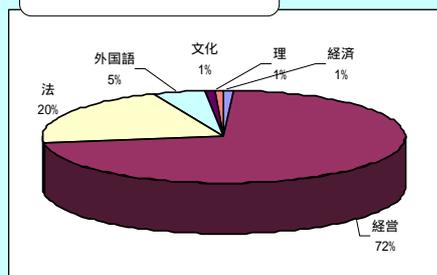
応募期間：平成17年6月1日~9月30日

選考期間：平成17年10月1日~10月26日

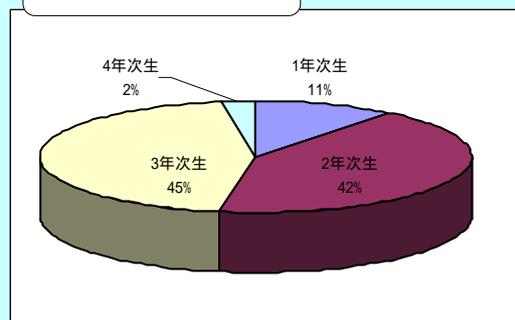
入賞発表：平成17年11月16日

表彰式：平成17年11月30日

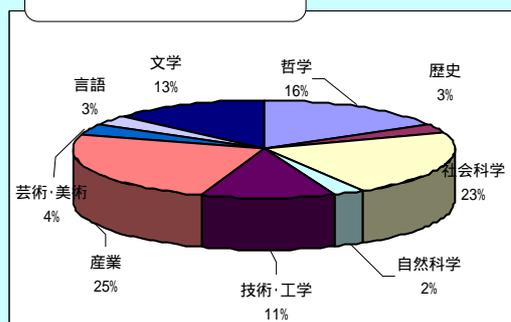
統計1. 学部別



統計2. 学年別



統計3. ジャンル別



職員選考委員より一言

書評を読んで気になる本を見つけたらすぐに図書館へ。書評を「ひとりの本好きが、本好きの友だちに出す手紙みたいなもの」(丸谷オー)と考え、気楽に書いてみよう。(近江)

正直に言うと、125篇の書評を読むことは苦しい経験でした。ですが、同じ数の図書と出会えたことは、喜びでもありました。皆さん、どうぞ来年も「発見者」となって私達と図書を引き合わせてください。(中上)

自分の考えを何らかの形に表現することは難しいことです。良いきっかけにして欲しいと思います。(真部)